

おりづる全国証言会 #6「新島の子どもたちと考える戦争と平和、そして命」

第6回目となるおりづる全国証言会は、新島で行われました。新島村在住の元ピースボートスタッフの伊藤雅恵さんが新島小学校と新島中学校での証言会を各校に提案し、小学校では4～6年生向けの平和学習の一環として、中学校では保護者や地域の住民向けの公開授業日（9月7日〔土〕）に行われた道徳地区公開講座としての証言会が実現しました。2校で2日間の開催であったことと、交通の便があまりよくないことから、田中熙巳さんには2泊3日の行程で来島していただき、ピースボートスタッフの小鍋匠が同行しました。

新島小学校

開催日：2019年9月6日（金）

開催場所：東京都新島村立新島小学校 音楽室

対象：4年生（20人）、5年生（9人）、6年生（11人）の児童、教員、保護者 約50名

証言者：田中熙巳さん（日本原水爆被害者団体協議会代表委員、長崎被爆者、埼玉県在住）

証言会の内容

9月4日（水）

- 原爆についての事前学習（伊藤から原爆やその被害、ピースボートの活動についての事前学習）

9月6日（金）

- 田中熙巳さん証言（35分）
- 会場のみなさんからの質問（5分）
- 集合写真撮影

小学校での証言会は、45分間という短い授業の中で行うことから、田中さんの証言が少しでも理解しやすいように2日前の9月4日（水）に事前学習というかたちで原爆や原爆の被害などについて伊藤から話をし、9月6日（金）に長崎で被爆した田中さんから実際の被爆体験を聞くという流れにしました。平和学習という枠組みの中での証言会だったため、74年前に戦争を行っていた日本が経験した原爆投下によってどのような被害があったのかを知り、「平和」や「戦争」について考えることを最終的なめあてに設定しました。

今回、小学生向けの証言会ということで気を付けたこととして、スライドなどに使用した資料は、児童の年齢を考慮し、できるだけ描写が過激ではないものを選び、写真は焼け野原などの景色、熱線などの被害を伝えるものは絵画を使いました。原爆の威力を表現している映像も実際のものではなく再現映像などを使うようにしました。描写が比較的過激なものを見せる前には、事前に児童に伝えて怖くて見ることができない場合には無理に見ずに顔を伏せておくように伝えたとこ、5人くらいの児童は顔を伏せていました。原爆ポスターは、景色や熱線で溶けたガラス瓶などの写真が多数だったものの、唯一、体の被害を写していた谷口稜暉さんの背中の中火傷の写真は、数名の児童から怖くて見ることができないという声があったので外しました。

事前学習では、担任の先生から「平和って何だろう？」を導入として、児童から「平和」と聞いて思い浮かぶことを発言してもらいました。その中から、「戦争がないこと」という言葉があがったので、「戦争って何だろう？」という質問をし、同じように思い浮かぶキーワードをあげてもらいました。児童からは、「殺し合い」「争い」「戦い」「国同士で戦う」「兵器、銃」「核爆弾」などのキーワードがありました。

そこで伊藤の方から、戦時中に日本が経験したことのひとつである広島、長崎での原爆投下、原爆とは何か、どんな被害があったのかということ、そしてこれだけの被害をもたらした原爆と同じ兵器である核兵器が世界中に15000発くらい存在すること、そしてその核兵器の中には広島や長崎の1000倍もの威力があるものがあるということなどを、スライドや映像を使いながら話し、最後にピースボートで行っているおりづるプロジェクトと、伊藤が担当した96回クルーズのおりづるプロジェクトの説明、その時に一緒にオーストラリアで証言会の活動をした田中熙巳さんという長崎被爆者の方が来てくれますという紹介をしました。

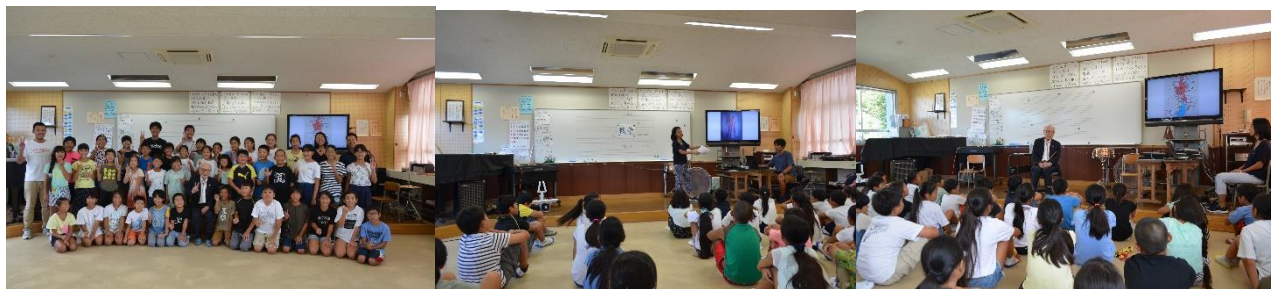
戦争体験はもちろん、原爆の被害などについても聞いたことがない児童ばかりだったので、恐怖心を持ちつつも全体的に集中して耳を傾けてくれていました。最後は、戦争は「国同士で戦う」ことだと言ってくれた児童がいたけれど、国同士が決めた戦争だったとしても、戦争というのは、何も罪のない多くの人たちが亡くなったり、大切な家族や友だちを失ったりすることで、実際に原爆を体験した田中さんが話をしに来てくれるので今回の学習がみんながこの先どのような世界を望むのか考えるきっかけになるといいです、と伝えて事前学習を終了しました。これに合わせてピースボートから借りてきていた「ミニミニ原爆展」という広島、長崎の22枚の原爆ポスターを会場の外の廊下に展示し、原爆の威力や被害について視覚的にも理解しやすいようにしました。

9月6日（金）の田中さんの証言は、できるだけ話を聞くことに集中してもらえるようにしたかったため、スライドなどはできるだけ使わないようにしましたが、話を聞いているだけだと集中力が保てない懸念もあったので、爆心地の地図や、キノコ雲、火傷をした人々を描いた絵などのスライドを何枚か用意し、田中さんの話に合わせてスライドを見せるようにしました。小学生が被爆体験の話をどこまで理解し、集中して聞けるのかについては田中さんも心配していたので、導入部分は、「どうやったら戦争がなく、みんなが仲良く、平和な世の中になると思う？」という質問から始めてくれました。みんながお互い仲が悪く、喧嘩ばかりしていたらクラスがどんな感じなのか、それぞれ自分たちに置き換えて想像するところから、戦争と平和について考える道筋ができたのではないかと思います。

そこから、田中さんが中学生たった13歳の時に爆心地から3.2kmの長崎の自宅で被爆した時のことを話してくれました。地図を見ながら当時、田中さんがいた場所や街の様子などを説明し、親戚の多くが爆心地のすぐ近くにいたこと、3日後にやっと親戚を探しに爆心地付近に入った時の様子や、家屋がほとんど崩壊し、焼き尽くされていたために、何も目印がなく、長い間、歩き回りやっとのことで親戚を見つけたこと、やっと見つけたけれど、5人の親戚を亡くしたことなどを話してくれました。また、現在、世界中には14000発以上の核兵器があることや、それを禁止する決まりができたこと、そのために一生懸命に活動をしていることを伝えてくれました。子どもたちが田中さんの体験を聞き、今の核兵器の現状を知ることで、どういう世界を望むのかを考えるきっかけになったと思います。

最後の質問では、数名の子どもたちが質問をしました。ある児童からは、家屋などはもちろん、たくさんの人たちが焼け焦げてしまったと田中さんが話していたけれど、親戚を見分けることができたのか、という質問がありました。田中さんからは、もちろん顔なども焦げていたりしていたので見分けるのは大変だったけれど、かろうじて残っていた家の残骸や、背格好や体の特徴などから、きっと親戚の叔母さんだろうとわかったと説明してくれました。また、先生からは、田中さんの同級生や友だちで亡くなった人はいたんですか、という質問がありました。幸いに田中さんが親しかった同級生や友だちには亡くなった人はいなかったけれど、田中さんが通っていた中学校とは別の中学校では亡くなった生徒がたくさんいたことを話してくれました。前日に会っていた、あるいは原爆が投下される直前まで一緒に過ごしていた家族や友だち一瞬で失うことがどういうことなのかということや、戦争によって何が失われてしまうのかということについて、自分の家族や友だちに置き換えて考えるきっかけとなったように思います。

最後に、田中さんから、改めてみんなが仲良くすることが大切であることと同じで、国と国が、お互い憎しみ合うのではなく、仲良くしていくことで戦争は起こらないはず、だから、みんなも友だちと仲良くしてください、というメッセージを子どもたちに伝えて証言会は終了となりました。



田中さんの話を聞いた子どもたちからの感想

小学校ではそれぞれの子どもたちが田中さんの話を聞いた感想文を書いてくれて、冊子にしたものを学校側から受け取りました。ほとんどの子どもたちが、戦争体験の話や、原爆の被害や被爆体験についての話を聞いたのが初めてだったので、田中さんの証言はとても印象的だったようです。田中さんの話を聞く中で、原爆投下後の状況や被害、家族や友人を亡くすということについて、どれだけつらいのかということ进行想像し、多くの子どもたちが戦争は絶対にいけないことであって、核兵器もなくさなければならないと思ったと書いてくれていました。また、戦争が起こらないように自分ができることを考えたいという意見や、友だちを大切に、これからも仲良くしていきたいという意見も多く見られました。恐怖心を感じながらも、戦争や原爆の被害について真剣に考えながら話を聞いてくれたと思います。

新島中学校

開催日：2019年9月7日（土）

開催場所：東京都新島村立新島中学校 モヤイラウンジ

対象：新島中学生約50名と保護者約10名

証言者：田中熙巳さん（日本原水爆被害者団体協議会代表委員、長崎被爆者、埼玉県在住）

証言会の内容

- 導入（35分）
- 被爆証言（40分）
- 質疑応答（10分）

小学校での証言会に続く翌9月7日（土）は、新島村立新島中学校の道徳授業地区公開講座として、新島中学校の1年生から3年生の全校生徒約50名を対象に証言会を行いました。参加してくれ中学生はこの日、証言会の前に、道徳の授業として「命」をテーマにマザーテレサなどについて学んでいました。そのあとに続いた証言会は中学校の校舎の中にある「モヤイラウンジ」で実施されました。会場の壁には、原子爆弾やきのこ雲、広島・長崎の被災状況などがわかる原爆パネルを展示しました。

証言会の冒頭に、導入として「原爆（核兵器）って何だろう？」と「今、何が問題なのか？（なぜ原爆投下から70年以上経っても証言を行っているのか）」の2つのテーマを軸にピースボートスタッフが説明しました。この導入のねらいは、原爆の特殊性を知っておくことで被害証言者の田中さんの証言をより深く理解してもらうことでした。田中さんは、前日に新島村立新島小学校の4年生から6年生にも証言をしていま

した。そのときの話を参考に、「被爆者」や「爆心地」など、田中さんの証言にでてくる言葉のなかで、事前に説明しておいた方がより理解が深まるであろうものを選定し、導入の部分に盛り込みました。また、原爆とはどのようなものかを知ってもらい、その後にそこに実際に人々が住んでいて、暮らしや人生があったということを理解してもらうための導入でもありました。はじめに8月6日、9日がなんの日かを尋ねると、ほぼすべての学生が広島と長崎に原爆が落とされた日だと知っていました。きのこ雲の写真をつかって、その写真がどれくらいの距離から撮られた写真なのか、その距離は、新島がある伊豆七島では、新島からどの島くらいまでの距離なのかを説明し、それらを通して写真だけでは伝わらない威力の大きさなどを説明しました。水爆実験の写真では、広島・長崎以外にも核実験によるヒバクシャもいることや、原爆の原料となる天然ウランの採掘時にも被曝する人がいる事実もあわせて説明しました。原爆の被害として、広島・長崎での死者数だけを伝えるのではなく、東京の空襲での死者数も写した上で、原爆の場合にはその死亡率が圧倒的に高いということ、無差別であることを通して、原爆の非人道性が際立っていることを説明しました。

証言は、被団協の代表委員をつとめる田中熙巳さんです。田中さん自身が当時、この日に証言を聞いている生徒たちと同じ年齢だったこともあり、どんなことを考えながら戦時中を過ごしていたかの話から証言は始まりました。田中さんは13歳のときに爆心地から約3キロの地点（自宅）で被爆しました。親族の5人は、爆心地から500mと700mのところに住んでおり、亡くなりました。自分たちと同じ歳で被爆した田中さんが、親戚を心配し、どうやって爆心地まで行ったのか。3日間かけて森を抜けて峠を越えて、町を一望できるところから町をみた時、町は吹き飛ばされて何もない状態でした。行きなれたはずの親戚の家がどこにあるかまったくわからなくなってしまっていた状況、そこで、かろうじて親戚の家だろうと判断できるものを見つけて、その瓦礫の下に真っ黒の遺体を見つけたこと。もちろんそれが親戚かどうかは、見ただけでは全くわからないくらいに真っ黒焦げになっていたおばさん。真っ黒焦げの遺体が町中に転がっている様子。写真では伝わらない生々しさと、たしかにそこに普通の人々の生活があったことが伝わりました。皮膚が焼けた人々が町を歩き回る様子の絵を紹介したときも、なぜ彼らが両腕を胸の前に上げて歩いているのかについて、それを目の前でみたからこそそのリアリティがありました。淡々とありながら、田中さんの言葉は、絵だけでは伝わりきらない、現実として起こったことなのだというのを伝えてくれました。友達、家族、親戚、近所の知りあい、そこにいた誰もが救えなかった相手がいるという現実が伝わってきました。

田中さんが被爆した年齢と証言を聞いていた生徒の年齢が近かったこともあり、生徒らはしっかりと証言に耳を傾けてくれました。また、親を失うより子を失うことの方が悲しいという言葉は、保護者の方にも強烈に響いたのではないかと思います。

会の最後に、未だにこの恐ろしい核兵器が世界にたくさんある事実をピースボートスタッフから簡単に説明しました。また、核兵器禁止条約という新しい条約ができたということ、この条約に唯一の戦争被爆国である日本が批准していないことも伝えました。

